

西宮文学案内

平成24年度 春期講座 第1回「小松左京の西宮マップ」

日時：2012年5月5日（土）14時から

場所：西宮市大学交流センター大講義室

講師：かんべむさし（小説家・SF作家）

河内：連休も終わりに近づいてきましたが、このシリーズを企画して一昨年から三年くらい続けたところ、応募者も増えてきて手応えを感じております。なぜ西宮にゆかりのある文芸作品や文芸者を取りあげてきたかと言いますと、たとえば森繁久弥さんが亡くなったとき、森繁さんが西宮育ちで今津中学の出身であると全然報道されない。亡くなられた小松左京さんも、安井小学校を出られて、今津や甲東園に長く住んでおられたと、ご存知ない市民が多くなってしまいました。私の父親が小松さんのお兄さんと甲陽中学の同級生で、私も大社小学校の出身ですから、私自身小松さんとけっこう縁は深いわけです。今日は、小松さんと同じSF作家、かんべむさしさんに小松左京さんの思い出を語っていただきます。かんべさんは西宮にお住まいで、西宮市民なら、ぜひ読んでいただきたい小説を書かれています。阪急ブレーブスと阪神タイガースが日本シリーズを争うという小説。その昔、阪急の今津線と阪神のレールをつながっていたらしくて、阪急と阪神の電車がぶつかりあうという、なんとも面白い小説です。それでは「小松左京さんと西宮について」語っていただきます。

かんべ：かんべでございます。私が小松さんにご面識をいただいたのは1975年のことで、昨年亡くなられるまでの36年間、折々に伺ったいろいろなお話や身辺エピソードなどをまじえながら、お話させていただきたいと思います。どうぞよろしく、お願いいたします。

この用意をしているとき、ゴールデンウィークですから、いろいろなことを思い出しました。私が25歳か26歳の時のゴールデンウィークというのは、資料としてお配りした神戸新聞のコピーにもありますように、コンテストに応募する小説の原稿を、ゴールデンウィークを全部つぶして書いてたんです。当時、私はサラリーマンでしたからね。で、そのコンテストで選外佳作になって参考作品で載せてもらい、小松さんが「いろいろ欠点があるけど、この人はまだ書けそうだ」と選評を書いてくださった。それがきっかけとなり、小松さんにご面識をいただけたのが、1975年の夏ということになるわけです。

それから2、3年経ちまして、1980年前後ですかSFブームというのがあって、むちゃくちゃ忙しくなった時期がありました。小松さんはその頃、小説以外の仕事でもとにかく忙しく、大阪のホテルプラザに事務所を持ってらして、ゴールデンウィークにも仕事に出てきてはりました。私らも駆け出しですけどもSFブームだったので忙しくて、ゴー

ルデンウィークつぶして原稿を書いていたら、小松さんから呼び出しの電話がかかってきて、「飲もう。メシ食おう」と。こっちはそんな余裕はないので、「4月末の締め切りをゴールデンウィーク明けまで伸ばしてもらってるんです」「もっと待ってもらったらええやないか」「小松さんは待ってもらえるけど、僕らは待ってもらえないんです」なんて会話がありました。何でゴールデンウィーク明けまでは待ってもらえるかというと、出版社も印刷所もみんな休んでるからですね。だから小松さんは、「あいつらだけ休んで、わたしが仕事してるのはむかつくから出てこい」と。

それでまあ、出ていきまして、おいしいものを食べたり一杯飲んだり。ある年にもゴールデンウィークに呼び出されて、ホテルプラザからタクシーで神戸へ行って、ステーキを食べましたかね。当時、神戸に住んでらした筒井康隆さんも呼び出しはって、一緒に飲んだりしました。で、またタクシーで帰ってきたんですけど、阪神高速で西宮を通りますと、小松さんが「戦争中に甲子園でな」と、体験談を教えてくださいはるとか、折々いろんなことがあったんで、年月が経ってみると、今年のゴールデンウィークは、小松さんが亡くなりだった追悼として話す題材を用意してるんやなと思ったら、何とも言えない気持ちになりました。本当言ったらまだ実感がないんですけどね……

さて。小松さんは1931年に大阪市西区の京町堀で生まれました。お父さんはもともと千葉県、お母さんは東京の方で、関東大震災前後にこちらに来られた。お父さんは薬学の学校出身ですが、理化学関係のお商売をしてはって、そういう関係の工場を経営されるようになり、工場を持たれるのと前後して西宮へ引っ越されたんですね。

小松さんはわりに引っ越し魔で、ざっと言いますと、大阪で生まれて、幼稚園から小学校にかけては、夙川に来て、尼崎に移り、また夙川に戻ったと自伝に書いてあります。そのあたりの細かい部分は省きますが、とにかく大阪で生まれて西宮に来ました。そして同じ西宮市内で今津の駅前に引っ越して、旧制中学の時代に、そこで空襲にあう。旧制神戸一中から、戦後は旧制の三高へ進んだ。京都ですから寮に入りはったんですが、旧制高校は学制改革で1年間で終わってしまい、また試験を受け直して新制の京都大学に入りました。卒業して就職がごちゃごちゃ揉めて、うまいこといかず、経済関係の業界誌に入ったり、お父さんの工場を手伝ったり。今津のご自宅がまだあったので、そこにいらしたのかもしれません。その後、結婚して甲東園のアパートに移りはりますが、年譜では、甲東園の前に甲子園の時代があったようにも書いてあります。で、甲東園で長男さんがお生まれになって、そのあとは今津で同居しはったみたいです。

その後お父さんの仕事の都合で一家あげて京都へ引っ越したけど、会社がうまくいかなって来た。小松さんも工場長になって奮闘するんですが、結局つぶれたんで京都を引き払って戻ってきて、ラジオの台本を書いたり、いろんな仕事をする。その頃は伊丹の稲野に住んではって、それから尼崎の富松に移ります。小松左京という名前前で産経新聞に書いたりSFマガジンに載ったりしたのは稲野と尼崎の時代が多かったんですが、名前が売れてきて立場も確定してからは、箕面へ引っ越しはります。最初は阪急箕面駅の近くでし

て、次に同じ箕面の奥の方へ移り、以後長く住まれて、結局はそこで亡くなられたわけです。ただし今日は「小松左京の西宮マップ」というタイトルでお話をするわけですから、あちこち引っ越した中の西宮時代、夙川と今津と甲東園関係をクローズアップして紹介いたします。

お配りした資料のなかの、『実（みのる）はいかにして左京になりしか』、実というのは小松さんの本名ですけど、その文章にも書かせてもらいましたが、人間の成長には環境というものが非常に大きく影響しますね。自分の家族、家庭環境、もちろん両親や祖父母の遺伝もあるでしょうけど、小さい頃に住んでいた町とか、その土地の雰囲気の影響は当然あって、さらにはそれがいつの時代であったかという時代の環境、つまり歴史環境もある。もちろん小松さんも、それらに大きな影響を受けてはるわけです。そして小松さんの戦前戦中戦後にかけてを一言でいいますと、いい環境で坊ちゃんとして育ったのが、戦争でむちゃくちゃにされたということになります。小松さんが生まれる前後の阪神間、西宮というところがどんなところで、どんな具合に発展した街かを簡単に紹介いたしますので、皆さん頭の中で想像してください。そして、そこに小松実という赤ちゃんが生まれたんだと思ってもらおうと、話が分かりやすくなります。

大阪・神戸間にいちばん早く走った汽車はもちろん今のJR、前の国鉄です。戦前は鉄道省、もっと昔は鉄道院と言ってたと思いますけど、明治7年にはもう大阪・神戸間を走っています。ただしこれは大動脈として東海道線を通すためのものですから、あんまり街々を細かく止まるような汽車じゃなかった。でも、明治5年に新橋・横浜に初めて汽車が通った、その2年後にはちゃんと阪神間にも通ってるんですね。その次に阪神間のベルト地帯に通ったのは阪神電車で、明治38年、日露戦争のときです。大阪・三宮間を既にある街を縫うようにしてレールを引いていったから、「福島」や「野田」「淀川」「尼崎」と、あそこの路線はくねくねしてますね。そのあとが阪急です。

阪急はもともと箕面有馬電気軌道といって宝塚線がメインで、神戸線の開通は1920年、大正9年です。当時、阪急電車は田んぼのなかを一直線に突っ切って神戸線を通した。そのときに夙川駅も西宮北口駅もできたんです。阪神がくねくねしてて、阪神電鉄カーブ式会社という冗談があるのに対し、阪急は一直線に神戸線を通した。面白いのは当時の阪急の広告が、「いつもがら空き」というキャッチフレーズを出してます。今なら考えられません。はやってないことを宣伝してるわけですからね。「いつもがら空き、座っていける阪急電車、景色が綺麗、早い」。そういうセールスポイントで神戸線売り出した。一直線ですから早いのは確かで、どんどんスピードアップしていく。阪神は「待たずに乗れる」とか「すぐに乗れる」とか、とにかく本数が多い。それに対して阪急はスピードで競う。「梅田」を出て「西宮北口」に止まって「三宮」とか、そういう特急を走らせたのが昭和一桁か10年くらいで、梅田と三宮を30分で走った。当時としたらすごいスピードで、最終的にはそれを25分にしたらしい。

おとうさんが阪急電車に務めてはったという、私より年長の人に聞いた話では、当時は

北口のあたりは一面スイカ畑で、夏場になると電車止めて運転手がスイカをもらい、また乗って電車を走らせていたという話を、親父から聞いたと言うてはりました。まさか客が乗ってる電車をとめてまでスイカもらってるとは思えませんから、回送電車だったんじゃないかと私は推測してるんですけど、いつもがら空きですからそういうことやっても平気だったのかもしれない。とにかく、そういう地帯を走ったのが阪急の神戸線でした。

これをどうやって商売にするのか。日本中の私鉄経営の先駆けとして有名な話ですが、阪急の小林一三さんは沿線開発をやりました。その大きな柱が2つあって、1つは、都心から遠距離のところに遊園地や温泉などのレジャー施設をつくる。もう1つは、途中で宅地造成して住宅を建てて郊外住宅を売り出す。西宮の昭和園や甲東園とかはそれでして、何故そういう風に郊外住宅が出来てきたかといいますと、大阪が明治以降、近代工業が発達して東洋一の一大工業都市になったことと関係しています。船場で商売していた人は、店の裏に行ったら居宅があるという職住一致だったのが、市電は通るしビルは建つし工場の煤煙はかかってくるというので、住む環境としてはあまり良くなってきたということがあり、お金持ちから順番に郊外へ移りだした。神戸線の芦屋や夙川にどんどん移ってきました。一方、神戸のほうは幕末の開港以降、貿易商社や工場が出来て発展し、お金持ちが増えてきた。第一次大戦中の造船ブームで大儲けした人たちも、神戸の山のほうや須磨のほう、芦屋とかに大別荘を建てた。

そういう風に都市が拡大するにしたがって、郊外へ郊外へと人口が移ってきた。それが阪神間の住宅街の元々の成り立ちです。阪神電車も、くねくね曲がりながらの路線でしたけど住宅開発、レジャー開発をしました。香櫨園は阪神の駅ですけど、明治の終わり頃には、香櫨園という遊園地もあったそうです。経営していたのが阪神電車なので、阪急は香櫨園という駅名が使えず、仕方がないから夙川にしたんですね。ウォータースライダーがあったり動物園があったり、関西で一番大きい遊園地だったらしい。今の阪神の香櫨園じゃなくて阪急の夙川の近所、羽衣町のあたりかな。夙川よりも神戸側のあたり一帯にあった香櫨園という遊園地に、都心からたくさんのお客さんがあったんですが、大正の初めくらいに潰れてしまったそうです。

戦前の傾向として、お金持ちたちは自分で家を建て、中流階級は借家住まいが多かった。このへんに限らず東京でもそうです。大正から昭和以降、都会で働くホワイトカラーが増えてきて、当時でいえば旧制の中学や高校を出たとかエリート側の人たちですけど、それでも家は借家のほうが多かったらしい。サラリーマン、大衆的な人たちが家を買いだすのは、戦後の高度成長期以降のことです。ローンを組んで頭金払ったらなんとかなると。池田首相の所得倍增政策でどんどん景気がよくなり、あの頃からやっとサラリーマンが自分の家を持つようになった。戦前は中流階級でも借家が多かったんです。

小松さんは尼崎で幼稚園に入って、西宮へ引っ越し、夙川の幼稚園に入って若松町というところに住んではった。夙川の線路に面したちよい山側。神戸線を夙川から北口へ向かって行く車内から見たら、コープ生協や、みそら幼稚園の見えるあたりが若松町で、木造

二階建ての部屋数の多い立派な家だったそうですが、お父さんが工場を経営してたくらいなのに、そこも借家だったそうです。で、その家で小松さんは幼稚園に通いだすんですが、尼崎で入った幼稚園は優しくて美しい先生で楽しかったのに、夙川に移ってからは、仏教系の白蓮幼稚園という園の園長先生がいかつい顔したおばあさんで、いっぺんに嫌になってしまった。それで幼稚園へ行くふりをして、近所で花を摘んだりして遊んでたという。登園拒否したんですね。昔ですから親がついていくわけじゃなく、勝手に行ってたからできたことでしょうか、2、3日ですぐばれてしまったそうです。

ご兄弟が多くて全部で五男一女。男の子5人、女の子1人。小松さんは次男ですが、小松さんも含めて2人か3人かが京大へ行ってはる。小松さんは文学部でイタリア文学専門ですが、他のご兄弟は工学部で冶金を専攻するとか理科系のほうです。でも、お兄さんから雑誌や本に載ってるいろんな物語なんかも教えてもらってたそうです。お父さんも薬学出身で、理化学の工場を経営してらしたから、知的な環境だし、生活に困ることもない。ぼんぼんです。ねえやと呼ばれる女中さんがいて、小松さんが腕白して親に怒られたりしたら替わりにねえやが土下座して謝ってくれたという。小松さんは、女性に悲しい目をさせたらいかなと、子供心に思ったと書いてはります。環境のいい夙川に住んで、お兄さんは頭のいい人で、ねえやもいる。住環境、家庭環境は非常によかったんですね。

もう一つ、小松さんをつくっていく上で大きな影響を与えたお母さんが、とてもしっかりした、いい意味の教育ママだったそうです。勉強せえと叱り倒す教育ママじゃなくて、教育というものを非常に重んじて、環境を整えるというタイプ。若松町は阪急の線路の北側ですから、小松さんは大社小学校に入った。昔のことですから崖崩れがあったり、蛇が出てくるところなんかを通ったそうですが、1学期が終わった秋から安井小学校へ転校したそうです。線路を南側に越えますから越境入学ですね。何でかという、自伝に書いてはりますが、いろいろ説があるそうです。崖くずれが危ないから母親が心配したという説があり、小松さんが蛇のぬけがらを持って帰ったら、お母さんが気味悪がって、そんなところに通わせられないと移らせたという説もある。同じ大社小学校へ行ってのお兄さんがあまりに腕白なので、その担任の先生から「弟さんは別の学校へ行ったほうがいい」と言われたからという説もあると書いてはる。本当のところはどうも、その当時、安井小学校のほうが教育環境がよかつたらしい。それで母親が転校させたんだらうと小松さんも推測してはります。

のちの話になりますが、小松さんが亡くなってから、あちこちで開かれた展示会を見に行きますと、昔の古い原稿用紙の書き損じの裏に、小説の構成メモを書いてはるなんてのが出てる。ラジオ大阪の原稿用紙で、いとしいさんのニュース漫才の台本原稿も残っています。それから、『日本アパッチ族』という鉄を食う人間が現れる話の構想メモでは、どういう風にしたら人間が鉄を食べるやろかと、化学式を使って一生懸命考えてはる。「よくこんな残ってましたね」と言ったら、「実は」と小松事務所の秘書の人が教えてくれました。小松さんが作家になろうというときお母さんが、「この子は作家になる。この先ずっ

と仕事をしていくとしたら、こういう細かいものでも必ずいつか必要になる日がくるから、資料は残しとかないかん」と、しまっておいたらいい。小松さんが結婚しはったときも、お母さんから奥さんへの申し送りで、「全部置いといてちょうだいね」と頼まれたそうです。展示される遺品のなかには、もし小松さんが見たら「なんでこんなものが出てるねん」とびっくりするというか、怒りはるものも混じってると思いますね。小松さんは捨てたと思ってたんでしょうけど、それがこれだけきちっと残ってるのはお母さんと奥さんの功績です。いま、小松事務所が総点検にかかっています。

そんなわけで大社小学校へ入ってから、安井小学校へ移りました。満州事変が昭和6年で、それから戦争の時代に入りますけど、まだ国力も文化も豊かで、みんなが楽しく過ごせる機会もあった。戦前の絶頂期と言いますか、昭和10年代にはまだそういう環境があって、ましてや阪神間ですから、小松さんは幼児体験でそういう時代からの影響を受けてはるわけですね。対談やエッセイに出てきますが、西宮北口の日芸会館と書いてはりますけど、そことか西宮戎神社とかで文楽をやってて連れて行ってもらったり、もちろん映画なんかも連れていってもらったし、このときにはもう香櫨園遊園地はありませんが、香櫨園の海水浴場は賑わっていて、子供の足で30分くらいで行けたので、よく泳ぎに行ったそうです。

当時の懐かしいお菓子をあげてはる中に、海水豆というのがおいしかったそうです。乾燥空豆を手ぬぐいかなんかにくんで禪に結び付けて泳いでると海水でふやける。ふやけると食べやすいし塩味でおいしいと、そんなのも懐かしいと書かれています。香櫨園にしろ打出の浜にしろ昔は水が綺麗でした。戦後の高度成長期の工業化以降汚れて、海水浴場は軒並み閉鎖になりましたが、それまではあちこちから客が来ていました。いろいろな会社の海の家もあったし、阪急夙川から香櫨園の浜まで連絡バスが出てましたからね。

それから、小松さんは小説や文学の分野だけでなく、学術的な共同研究とか、日本万国博や花博なんかのビックイベントとか、多方面に仕事の範囲を広げて、しまいには自分で映画もつくりはりました。仕事の範囲が広がるといろんな方との交流も増えて、その一環として地質学や考古学との方ともお付き合いしてはった。その方との対談の中にあっただと思います。安井小学校の頃に甲山とか六甲山とかへ化石を掘りに行ったそうです。対談相手の地質学者が言うには、「あのへんは100万年くらい前の海底の地層があがっているんです」と。だから芦屋の奥池からは昔の海岸の砂が出てくる。一方、100万年前の海底が、現在の大阪湾ではどうなっているかという、逆に今の海底から500メートル下にあるという。100万年前に均一だった海底が上下1000メートル。大阪湾と六甲山とでそれくらいの落差ができたんだそうですね。

これも安井小学校時代の話ですが、戦前の日本社会の絶頂期だったとき、小松さんは現在のNHK、当時の日本放送協会の大阪放送局でラジオ番組をやりはったんですね。小学5年のとき、昭和16年の4月にそこで「子供放送局」という番組が出来て、そのパーソナリティーに小松実少年が西宮の小学校から選ばれたんです。私それを聞いたとき、いろ

んな小学校から順番に出るのに選ばれたのかなと思ったんですが、メインパーソナリティーは小松さん一人で、週1回、土曜日に30分か40分の番組、子供たちの朗読があったりクラシック音楽の演奏があったり…それを仕切ったりして進行役を勤めたという。これは安井小学校の音楽の先生が当時の大阪放送局の担当者と友達だったとかで、小松さんが推薦されたそうです。

なぜかといいますと、お父さんは千葉県、お母さんは東京ですから標準語が喋れたんですね。家の中でご両親が喋る標準語が耳から入ってますので、この頃から後年に到るまで標準語と大阪弁をしゃべれた。いわば、国内版のバイリンガル。当時子供を起用して番組をやるとしても、関西で標準語がしゃべれる子供なんて珍しいですからね。しかも戦前は標準語化運動が盛んで、とにかく方言はダメだと。地方によっては方言しゃべったら罰を与えられるという、ひどい話もある。それくらい、公式的には標準語を押し付けた時代でした。それで一人で阪急に乗って梅田へ出て、馬場町にあった放送局に通った。それが面白かった楽しかったと思い出を書いています。この放送は昭和16年4月に始まり、12月に太平洋戦争が始まったので中断になりました。

そんな風に非常に良い環境の中で神戸一中に入った、その次の年に今津に移ります。昔は旧制ですから中学は5年制ですね。小学校を出た後、12歳で入って、今の高校2年までは中学に通う。最初の一年は夙川から、次の4年間は今津から阪急で通いはった。神戸一中は名門校だけれども、スローガンが質実剛健じゃなくて「質素剛健」だったそうで。六甲山系のすぐ下にあって、六甲おろしの強風が吹き下りてくるのに、冬でも運動場に立って、お茶も何もなしでお弁当食べさせられたという。そういう伝統のある学校ですが、すでに太平洋戦争が始まっていますから、ますますえげつなくなってきた、配属将校が生徒をどつき倒すわ、教師も軍人に迎合して生徒たちをめちゃくちゃに扱うわ、ひどい時代になってたわけです。

神戸一中へ通われたときの、小松さんの仇名が「うかれ」。すぐ浮かれるからということで、「いちびり」やったんですね。私が当時の話を聞かせてもらって、「それは小松さん、そこまでやったら、どつかれるでしょう」とか思うことをしてはる。たとえば職員室に呼ばれて先生に説教されてビンタ取られて、にもかかわらず、先生が椅子に座ろうとしたとき椅子を引いたんで、先生がもののみごとくにひっくり返って、またどつかれたという。「普通そんなことしないでしょ」と小松さんに言ったことがあります。「それは教師もなお怒りますよ。反抗したんですか？」と聞いたら「いや。つい引いてしもたんや」 まあ、いちびりというのはそんなものですけどね。

そうかと思うと、正月の元日の朝、日の出前に学校に集まって運動場に整列して日の出を拝む。そのあと皇居のほうへ向かって遙拝するのかな。とにかく、みんなきちんと並んでシーンとしています。ところが小松さん、いよいよ日が昇ってきたら、あきれたボーイズの「地球の上に朝が来た」という歌を大きな声でうたってしまった。シーンとした元旦の儀式のときにですよ。それでまたどつき倒されて、むちゃくちゃな時代にむちゃなことを

していたので、神戸一中には楽しい思い出とともに、ひどい仕打ちを受けた記憶もたくさんあるそうです。小松さんは人を憎んだり根に持ったりする人じゃない。優しくて度量の大きい人ですが、教師に普通にどつかれるのは仕方ない、配属将校がどつくのも仕方ないと。でも、その尻馬に乗って自分をいじめ倒した教師が終戦になったら、「私は実は民主主義者でした」とか言い出した。これだけは小松さん、最後まで許してはらへんかったみたいで。よっぽどひどかったんでしょね。

そんな中で昭和19年に今津に引っ越します。20年に入ると、いよいよ空襲が本格化してきた。大阪はバンバンやられてますし、神戸も三菱や川崎の造船所などがあるから当然爆撃されます。小松さんは勤労働員で神戸一中から川崎造船所へ行って、小型の潜水艦なんかを造る現場にまわされてたらしい。そして空襲の範囲がどんどん広がってきて、ついに阪神間の住宅都市にも及びだしました。西宮の初めての空襲は昭和20年5月で、5月から8月の終戦までに5回やられた。その中で一番ひどかったのは8月5日から6日にかけての空襲で、いまのJRの線路から南側がほとんど丸焼け状態になったそうです。そんな状況のなかで小松さんは川崎造船所に行っていたんだけど、空襲で電車が止まりますので、くたびれてるし食糧不足でお腹も減ってるのに、今津まで20キロくらいを歩いて帰ってきたという。おまけに、くたくたになって寝ると夜間の空襲があったりして、その翌朝、また神戸の動員先へ行かないといかん。常に疲れてて、お腹も空いてるという、悲惨な戦争末期だったそうです。

今津の家は大きな家だったんですが、お母さん妹さん弟さんは疎開してはった。お兄さんは行った学校の関係で名古屋の工場に勤労働員されてて、今津の家にはお父さんと小松さんが二人で住んでました。お父さんは仕事で出張に行ったりする。たぶん8月5日か6日の大空襲のときだろうと思いますが、小松さんは1人で今津の家の留守番をしていた。阪神電車本線の北側の津門宝津町で、阪急の今津線の神戸側。今、クリーニング屋さんがありますが、そこで1人で留守番をしていた夜に空襲にあい、焼夷弾が雨あられと降ってきたそうです。屋根に落ちた焼夷弾が軒先に引っかかっているのを1人で叩き落として、火を噴いてるのを濡れたムシロか何かを被して消したりして、見事に家が焼けずにすんだそうです。

焼夷弾というのは、B29が飛んできてバラバラと落とす途中でバーンと弾けるんですが、六角形か八角形の筒を何十本も束ねて鉄のバンドでくくってある。それが途中で弾けて、筒それぞれが広範囲に落ちてくる。中に油が詰まっててボウボウ燃える油脂焼夷弾と、アルミニウムの粉末なんかが高熱で燃えるテルミット焼夷弾…そんなのがバラバラ落ちてくる。小松さんが消したのは油脂焼夷弾でしょうね。ベトナム戦争のとき米軍がナパーム弾を使って残虐だと問題になったけど、実は日本空襲に大量使用された油脂焼夷弾が、ナパーム弾の元祖なんです。アメリカが焼夷弾をばら撒いて全国の都市を焼き払った理屈として、最初は軍需工場や軍の施設の精密爆撃をしていたけど、どうも効果が上がらないので、カーチス・ルメイという将軍が都市を全部焼き払えと言った。それは戦争法規上まず

いだろうという意見が出たら、日本は下請け孫請けの拡散で、しまいには家の中の土間で部品を作ったりしている国だから、町のどこに工場があるか分からない。だから市街地全部を戦争協力地帯と見なしていいんだという理屈で無差別爆撃が始まった。日本が焼き払われたのはそういう強者の論理によってなんです。ところが何とこのカーチス・ルメイは戦後、航空自衛隊を育てたという理由で日本の勲一等旭日大綬章を貰っています。歴史というのは恐ろしい、政治というのは怖いものだという見本みたいな話ですね。

戦争中は阪神間も軍需工場地帯になりました。鳴尾の浜も戦前は競馬場があつて運動公園があり、甲子園球場が出来る前はそこで全国中等学校野球大会、今の高校野球が行われていた。それを全部つぶして川西航空機の鳴尾工場にして、飛行機を作っていたわけです。競馬場も廃止になって試験飛行用の飛行場になる。宝塚の今の阪神競馬場のところにも川西航空機の大工場があつた。戦後、川西航空機、今の新明和工業ですが、その本社と工場は宝塚に集約されて鳴尾は元通りに返還されたんですね。でも競馬場はつぶしたままですから、替わりに仁川に競馬場が出来ました。甲子園球場も接収されて、戦争中は観客席が高射砲の陣地、グラウンドは野菜畑。一般の人用ではなく軍とか工場用だろうと思えますが。最末期には甲子園球場の近くにあつた国際試合もできるテニスコートが、防空戦闘機の滑走路になったそうです。

西宮にもいろんな部隊が駐屯してまして、甲子園ホテルは海軍病院の分院。浜脇小学校に陸軍の部隊が駐屯して、甲子園球場の近くにあつた旧制の甲陽中学、後の甲陽高校にも連隊本部があつた。関学とかも接収されて、校舎が目立ったらいけないからとコールタールで黒く塗られてたらしい。夙川のカトリック教会が海軍の療品廠。戦争を経験した人にしか書き残せない凄惨な話だなと思ったのは、小松さんが焼夷弾をたたき消した日と同じ空襲だつたんだろうと思えますけど、甲子園球場に避難して、通路を駆け上がって観客席に出てグラウンドを見た人が、生涯忘れられない光景を見たと書いておられます。野菜畑になっているグラウンドに、まるでバットの林のように、焼夷弾の筒が何百本も突き刺さってたんだそうで、もし私が戦争を題材にした阪神間の小説を書けといわれても、そんな想像とてもできない。見た人でないと分からないことですね。

小松さんも、川崎造船所が空襲を受けて飛行機に追いかけられ、ジグザグに逃げたらしいのに、飛行機が向かってくる方向に向かって逃げたので追いかけられることになった。人に横手へ引っぱってもらったので助かったそうです。今津に帰ってくる時、黒焦げになった死体があるままだつたり、爆風で飛んできたトタン屋根で馬が首を切られて死んだり、地獄絵図ですね。そういう時代を経て、やっと戦争が終わります。終戦直後、友達とあちこち見て歩いてたら、甲子園球場あたりの松林の中に防空戦闘機「雷電」が隠れてあつた。小松さんは外から見てただけど、友達が操縦席に入ってあちこちいじりだして、何かボタンを押したら機関砲がドドドッと火を噴いたという。終戦から2、3日ですから、まだ弾を抜いてなかったんですね。「あやうく殺されるどころやった」って言うてはりましたけど、殺されるどころじゃない。機関砲ですからね、当たったら爆発する弾で

すから、バラバラになります。雷電ですから20ミリ機関砲。直径2センチくらいの弾ですからね。

小松さんが自伝やエッセイに書いてはりますけど、終戦後、何もすることがない、学校も休み、宿題もない、これからどうなるかも分からない。本当にボーっとしていたそうです。配給のまずいもの食べて、あとは寝るだけ。後から思うと不思議な時空間だった。ある意味、あんな贅沢な休暇はなかったと繰り返し書いておられます。これは、作家やエッセイストに限らず、戦争体験者一般の回想談にもよく出てきます。戦地から帰ってきて何していいか分からないし、何を考えていたかも覚えてない。そういう自伝なんかはものすごく多い。解放感と虚脱感、最悪の事態はもう終わったという安心感ですかね。これ以上悪くなることはない、これから先は少しずつでも良くなっていくはずだという期待みたいなものがあるのか知りませんが、不思議な時空間だったそうです。といっても2.3週間ですかね。そのうち、学校から呼び出しがあって出て行くことになったわけですから。

小松さんが感激したのは、終戦の8月15日から2、3日あと。家でボーッと寝転がっていたらイワシを売りにきたそうです。うわっと思って鍋かなんか持って飛び出したら、近所のおばさんたちも出てきた。それまでは食料は統制が厳しくて、魚屋さんも来なくなっていたんです。海岸地帯が軍の管理下に置かれて、要塞じゃないけど軍隊やらぐたりするから一般人は立ち入れず、漁ができない。魚を売りにくるなんて有り得なかったんですね。それが終戦で静かになった町におっちゃんやイワシを売りにきた。近所のおばちゃんの中には、生きた魚を見るのは久しぶりやと泣いてる人もいた。イワシを塩焼きかなんかにして食べて、本当においしかったと書いてはります。私は戦後生まれですから、本当の空腹なんて想像の埒外にあるんですけど、それはもう、おいしかったやろうなあとと思います。

しばらくすると進駐軍が入ってきまして、小松さんは戦後における三大ショックを経験します。今津の駅前にも闇市ができたそうです。旧軍関係の隠匿物資や進駐軍の物資の横流し、非合法のフリーマーケットですね。その中で経験した三大ショックは、まず、アメリカのハーシーのチョコレートが脳にガンとくるほど旨かった。これは特に戦争を経験した子供は皆さん書いてますね。こんなに旨いものがあるのか、アメリカのお菓子はこんなものなのかと。ただし小松さんが書いてはりますが、作家になってからアメリカへ行ってハーシーのチョコレートを食べたら、あんまり旨いものでもない、大したものじゃなかったそうです。しかし終戦直後、食べるものが満足になくて、おやつもなくて、はったい何か何かを食べてた子供がチョコレート食べたら、そりゃおいしかったでしょう。

三大ショックの2つ目。神戸一中にまた通うようになり、友達がいい匂いさせてるから、「チョコレートもってるやろ。くれ」と言ったら、「チョコレートと違う。たばこや」。進駐軍のたばこ。ラッキーストライクかなんかでしょうね。闇市で誰かが買ってきて、中学生でたばこを吸ってる者がいたんでしょう。一本貰って吸ったら、これもガンときた。旨かったし、香りがよかった。ラッキーストライクは今も売ってますけど、そんなに旨い

とは思えんらしい。でも日本の戦争中の状況からいえば、たばこも配給で、しかも一日に二、三本。しまいにはみんな畳の井草を切つてとか、馬糞を乾かしたのとかを、辞書の紙を破いて巻いて吸ってたんですからね。そうかと思うと、進駐軍の携帯食料でレーションというのがある。小型の箱を開けると、一食分の乾パンみたいなのと、ポークビーンズか何かの缶詰と、食後にチョコレートとたばこまで入ってる。兵隊がそれを持って移動してるわけで、日本の兵隊とえらい違い。「相手はこんなん食べてたんか。負けるはずや」と思ったということは、これもいろんな人が書いてます。

三大ショックのもう一つは、戦後すぐですからまだ民放ラジオはなかったんですけど、こないだまで軍歌とか戦時歌謡とか流してた公共放送からスイングジャズが流れてきた。もちろん小松さんは、スイングジャズはよく知ってはるんですよ。戦前の古き良き時代に、ご兄弟も音楽が好きで楽器演奏したりしてましたからね。でも戦争中はそんなの放送禁止でした。それが終戦後、NHKからスイングジャズが流れてきた。その解放感、自由感。三大ショックというのは、いま私がまとめて言ってる表現で、小松さんがそう書いてはるわけではありませんが、とにかく衝撃を受けたことを書いてはります。

阪神間の芦屋や夙川はお金持ちが多いから、ダンスパーティーが流行り出したそうです。すぐさま自由を謳歌しだしたんですね。焼け残ってる大きな家がありますから、そこでダンスパーティーとかをやっていた。そこにアルバイトで、終戦後、ご兄弟でバンドを組んで演奏をしに行く。小松さんも加わってあちこちに行き、いいアルバイトになったそうです。神戸一中でも友達が集まってジャズのバンドを組んだ。その時は小松さんはヴァイオリンとかを受け持った。

バンド仲間の一人に、非常に歌がうまい、ジェスチャーとかもうまい、面白い生徒がいた。この芸達者な仲間というのが、高島忠夫さんです。それで、いまも言いましたように、小松さんはご兄弟でもバンドを組んでダンスパーティーとかいろいろ行っていた。今津に徳川の家筋の松平さんという大きなお屋敷があり、そこにも行った。その家には近所でも評判の美人姉妹がいて、一人は現在の芦屋女子高校に通ってはった。阪神で芦屋まで行ってバスで通ってたんでしょうかね。何とかその深窓の令嬢と話がしたいと、今津から阪急で通っていた小松さんは、わざわざ阪神電車に芦屋まで乗って話しかけたこともあるという。この深窓の令嬢の松平さんというのが、後年の宝塚歌劇のトップスター、寿美花代さんです。

その憧れの令嬢の寿美花代さんと、バンドを一緒にやっていた高島忠夫さんが、なんと夫婦になっちゃった。たぶん小松さんは心の中でだいぶ焼いてはったと思います。その話を聞かせてもらうときなんか、言葉の端々に「クソーッ。あの高島め」と思っはるのが出てましたからね。高島さんは神戸一中から関学へ行き、中退して新東宝の俳優になりました。人から聞いた話ですが、小松さんがテレビにも出るようになった頃、高島さんが司会するスタジオ番組にゲスト出演しはったことがあった。神戸一中の話なんかをして、アシスタントが「どんな生徒さんでしたか？」と訊いたら小松さんが、「こいつ中学の時、

インキンやってん」。生放送ですよ。高島さん真っ赤になって「そんなの中学の時、戦争中だけでしたから、もうとっくに治りましたから」と必死に打ち消してはったらしい。生放送でそんなことを言っちゃうなんて、ほんまにいちびりですね。

大学時代は共産党に一時籍があったりして、左翼系の運動もしていたので就職試験を全部落とされた。それで業界誌的な会社に入って仕事をしたり、お父さんの工場を手伝ったりしまして、その頃からそろそろ本式に物を書き出す。物を書くのはもともと好きだったし、中学生の頃から小説を書いたりしてはりました。作家になろうと思ったのは、やっぱり戦争体験が大きく影響してるんですね。文学というものには興味があったし、ダンテの「神曲」を読んで、それで専攻はイタリア文学を選んだけれど、日本の今でいう純文学的な文学でもって自分の経験した戦争とか悲惨さを書くという志向はなかった。

本土決戦で一億玉砕だと皆が信じてたのに、原爆を落とされて敗戦になった。当時小松さんは14歳でした。戦争中に徴兵年齢が引き下げられて、それまでは20歳だったのが終戦のときには17歳まで引き下げられてた。もし本土決戦になって延々戦争を続けていたら、年月が経ちますから小松さんは15歳16歳になる。一方、徴兵年齢は兵隊が足りないからどんどん下がっていく。ひょっとしたら自分も16歳とかで兵隊にとられていたかもしれない可能性は本当にあった。それは小松さんも覚悟してたんですね。

小学生の時から近視でメガネかけてはりまして、前に言いましたラジオの子供放送局の写真にも、丸坊主で丸メガネかけた写真が残っています。神戸一中時代も丸メガネかけて戦闘帽みたいな帽子被って。目が悪いから配属将校にボロカスに言われて、「おまえらみたいなのは使いものにならん」。近眼で鉄砲なんか打てるかということでしょう。ひどいのは「おまえらは本土決戦になったら蝸壺にもぐって竹槍持っとけ。竹槍で戦車の腹を突け」と言われて、「そんなことが何になるねん。竹槍で戦車ついて」と理屈いったら、またどつかれる。向こうは本気で言ってるんですからね。そんな風に言われて育ち、自分も覚悟していたところが原爆落とされて終戦になり、自分は死ななくてすんだけど原爆で何十万人も死んでいる。核兵器がついに現実のものになった。戦前の少年空想科学小説みたいなのでよくありました。マッチ箱一個で島が吹っ飛ぶとかいう話がね。お兄さんが理科系でしたから広島に新型爆弾と新聞に出たときに、「これ原爆やぞ」とちゃんと教えてくれた。実際、終戦後いろいろ情報が伝わってきた。広島ではその時点で、十何万人もいっぺんに死んでる。

それから時間が経つと、沖縄の情報も伝わってきた。民間人を巻き込んでの大激戦で、民間人は10万人ぐらい死んでる。鉄血勤皇隊、ひめゆり部隊とか、この頃の小松さんと同じ年で召集されて、前線に出ていたんです。鉄血勤皇隊というのは県下の旧制中学、師範学校、農林学校、水産学校とか。ひめゆり部隊は沖縄県立第一高等女学校と師範学校の女子部でしたか。とにかく自分と同じ年齢の中学生なんかが、男の子も女の子も、空襲ではなく最前線で死んでいた。自分もそのつもりだったけど死なずにすんだ。罪の意識みたいなものを感じはったんでしょう。この意識が、私らの想像する以上に大きい。

戦争中、思い出すのも苦しいくらい嫌なこともあった。最後まで許さん人間もできた。それから原爆のひどさ、日本が本土決戦で滅亡に至ってたらどうなっただろう。そんなことまでして戦おうとした日本人て一体なんやねん。日本という国はどういう国なんだ。そういうことを自分は文学に書こうと思ったと、これははっきり最初から定めてはりました。戦争体験を通して日本と日本人を考える。ただし自分の書き方として、あったことや経験したことをそのまま小説にはしない。必ず他の設定、他の話にして、一般的に通用するようにして書くという。それは最初から決めてはりました。

『日本沈没』が実はそうなんです。日本人を、日本という国を考えるための仕掛けとして、日本を沈没させたんです。大ベストセラーで、映画にもなった『日本沈没』は、実はあれがまだ大長編のイントロで、日本人とは何か、日本とはどんな国なのかをリアルにつきつめて考えたいし、日本が駄目になっていくのもリアルに考えなくてはいけない。それで、そのための前提条件として日本という国を一度消滅させるために、あれだけの大長編がイントロとして書かれたんです。『日本沈没』を書くために、地球物理学の先生と勉強会開いたり、ものすごい勉強しはったんです。文学に対する自分の思い、生涯をかけてやっていこうとする大きなテーマは戦争であり、同年代の人が死んだ負い目であり、核に対する怒りであり、つまり反核反戦ですね。だから、京大当時は反戦反核運動といえれば共産党という状況だったので、そっちにも加わった。でも、党派性とか、政治的な駆け引きとかが出ますから嫌気がさして抜けはったんですけどね。

結婚して甲東園のアパートに住んでいたとき、既に小松左京というペンネームで原稿を書いてはりました。作家になり出した時代ですね。最初は上大市の六畳一間のアパート。あのあたり、現在もまだ田んぼや畑が残ってますけども、私は関学の出身で、その当時も上大市からいまの市民病院があるあたりは、見渡す限り田んぼや畑でした。その田んぼの中に地主さんがやってるのがわかるようなアパートが、確かにたくさん建ってました。小松さんのいたアパートも農家の人がやってはったんですね。朝起きたら各部屋のドアの前に、収穫したばかりのじゃがいもが一山ずつ置いてあったりしたという、親切な大家さんやったそうです。そこでラジオ番組の構成やら、新聞に載せる書評やら、いろんな仕事をしはったけど、お金はそう多くは入ってきません。苦闘時代です。お父さんの工場もつぶれて借金もあつたりしますから、家財道具を質に入れたりもしはったそうです。

そんなとき、奥さんが聴いてたラジオがなくなって、夜、小松さんが帰るとぼつんとさびしそうに座ってはった。本当は壊れて修理に出してたんですが、小松さんの昔のエッセイには、ついにあのラジオも質屋にいったと書いてある。かわいそうにと思って娯楽を与えようと原稿を書いたのが、「日本アパッチ族」の原型になる、人間が鉄を食いだすというお話です。それを毎日少しずつ書いては、朝仕事に行くときに卓袱台に置いていく。奥さんも面白がって読んでくれたそうです。同じアパートの奥さんたちに「こんなの書いてる」と喋ったら、最初のうちは「おもしろいね」といつてたけど、鉄を食べるといって変な顔をします。SF的なことは近所の奥さんたちには分からなかったらしい。時代が時代、

昭和33年のことですからね。それからSFマガジンのコンテストにも応募して、『地には平和を』という、日本があのまま戦争を続けて本土決戦になったらどうなっていたかという短編に、戦争中の小松さんと覚しき少年が出てきます。

奥さんが上大市で出産されたので、また今津に戻りました。それから京都へ行き、伊丹へ行き、富松へ移り、この頃にどんどん小松左京として忙しくなり、箕面に移ったあたりで天下の小松左京になった。一番忙しい時期なんてすごかったですよ。東京に事務所があって秘書がいて、ホテルプラザにも事務所があって秘書がいて、箕面の自宅にも秘書がいた。三か所で秘書が仕事の整理していた。当時の小松さんの秘書は、いわば仕事を断るための秘書だったんです。いろんな仕事が次から次に来ますから、忙しいときには全部引き受けられない。小松さんは優しい人だし、知り合いから頼まれたら断れない。そのあたりは秘書がブロックしてたんですね。

小松さんに聞いた笑い話ですが、われわれホテルプラザにはよく行って、飲みに行ったりするときの集合場所でしたが、あるとき秘書が変わった。何人か変わりましたが、「前におった秘書やけどな、あの子が初めてきたとき、わしが用事で出かけて帰ってきたら、『先生、留守の間にお電話があったので、お仕事一つとっておきました』と意気揚々と報告しよった」ということがあったそうです。初めてきた秘書は、仕事を取ることが立派なことだと思ったんでしょう。今さら秘書の勘違いとは言えないから引き受けてやりはったそうですが、それくらい忙しかった。

いろんな思い出をしゃべっていると、ホテルプラザの事務所の様子が浮かんできます。何人目かの20代前半くらいの若い秘書がいて、「今度入った〇〇さんや」と紹介されて挨拶したら、最初だから目がおどおどしてました。ところが三か月ぐらいしてまた行くことがあり、「お酒もつとくれ」と小松さんが言ったら、「先生。そんなに飲んじゃだめですよ」とあやしてるんですね。女性というのは適応能力がすごい。三か月で20何歳の女の子が母親的にあやしてました。小松さんは飲みだしたらきりがいいから。そんなこともありましたね。

西宮時代は夙川・今津・甲東園の3箇所。そして最後にもう一回、歳月がたってから小松さんが西宮を歩いて取材して、原稿にもしはったのが阪神淡路大震災です。もちろん西宮だけではなく、主要な被災現場を全部歩いた。1995年にはいろんなことがあり、1月にあの地震があつて、3月に地下鉄サリン事件があつて、それから円高で株価が下がったりもしてた。大阪府の知事選挙があつて小松さんもひきずりこまれかけたとか。自分が尊敬している学者さんとかが次々に亡くなりはったりもした。そんな中、震災のルポを一年間、週一回、毎日新聞に連載したというので過労になり、震災被害の実情実体にショックも受けて、それでうつ病になりはったんです。

小松さんは自分の書いたものに対しての責任感が強い人で、さっき六甲山の化石の話をしました。『日本沈没』を書くときに、そういう地層や地学関係のことも、全部自分は調べたはずだと。ところが、阪神間にあんな活断層があつて、ものすごい地震が起こりうる

なんて、その時点では知らなかったし、分からなかった。分からないのが当たり前なんです、誰も知らなかったんですから。私なんか大学の頃、兵庫県、特に阪神間は六甲山の岩盤の上の土地だから絶対地震は起きないと誰かに聞かされて、なるほどそうかと納得してましたからね。だから小松さんも『日本沈没』書くとき、あんな阪神間の地面の下を活断層が通ってるなんて考えもつかなかった。自分の勉強が足りなかったという自責の念がものすごく大きかった。仕方がないですよ。官民ともに専門家も知らなかったんですから。でも書いたものがベストセラーになったので責任を感じはった。うつ病の一端はそのせいかもしれません。最大の原因は過労でしょうけどね。

小松さんはヒューマニストでロマンティストでした。人間を信じる。世の中には美しいものがある、気高いものがあるんだと。あれだけ嫌な戦中戦後時代、苦しいことも山ほど経験したけど、その思いだけは最後まで失わなかった。抜粋ですが、「美しいもの、素晴らしいもの、良いもの、立派なものへの幼いなりの感動と記憶が、何か自分を救う間接的な手がかりを与え続けてくれたように思う」「大自然の雄大さに比べれば人間の争いや執念などちっぽけなものにすぎない」「とにかく事実を事実として受け入れたうたで、新しい生き方を一緒に考えようじゃないか。そういうことを考えて自分は小説を書いています」と、まだ若い頃からいろんなエッセイに書いてはります。

幼いなりの感動と記憶。世の中、悪いやつ、下劣なやつもおるけど、いい人や立派な人もいるというヒューマニスト的な考え方。その幼いなりの感動というものを、西宮が全部作ったとは言いませんが、阪神間がそれを作ったことは確かだと思います。生まれ育ち、生活環境、いい思い出が残った戦前の時代環境なども戦争でむちゃくちゃにされたけど、幼いなりの感動が残ったから最後までヒューマニストであり、ロマンティストであり続けられた。小松さんは多面的な方ですから、その人生や仕事を一本の筋だけで解釈するのは不可能ですけど、西宮時代の時代環境・家庭環境・土地環境が、小松実少年に大きな影響を与えたことだけは間違いありません。

というところで、時間がきましたので、これで終わらせていただきます。どうも、ありがとうございました。